

94
177

作者 冠郎 八



94-776



太郎冠者作

ない

い

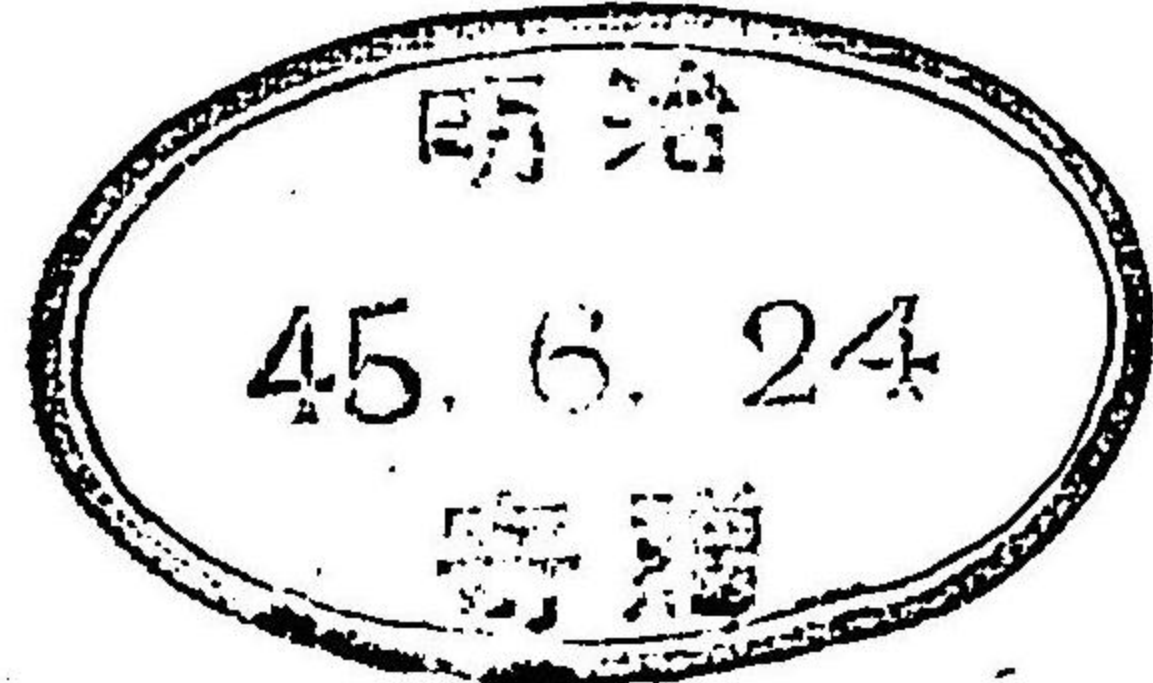
相そう

談だん

清水屋石衛門

寄贈本

帝國劇場六月興行



談 相 い な 來 出

劇喜 出來ない相談

序幕 前島家住宅居間の場

登場役人

前島隠居武子	七十歳
同 孫娘鳴子	十七歳
友人櫻井八重子	十八歳
同 青柳絲子	十八歳
召使およし	廿二歳

平舞臺居間の飾付宜敷あつて上手寄りに隠居
武子昔氣質の上品なる服装にて曲録に寄掛り
ながら心地能げに坐眠をしつゝ召使およしに
肩を揉ます、少數下手に孫娘鳴子嬢頗る現代
式の服装にて樂譜臺を前に置き立ちたる儘怪
しき手付恰合にて眼の色を替へ一心にヴァキ
オリンの練習中の模様舞臺の音楽を借りて幕
明く。

鳴(片足にて拍子を取りながら)「一と二と三と四と

一と二と三と四と一と二と三と四と一と二と三
と四……………

突然襟元より氷を入れらるゝ如き音すれば流
石の老人も急に眼を醒し

武「オイ鳥渡およしや今何處かて人が縊り殺された
様な聲がしたが誰か何うか爲れたのかえ

よしイーエ御隠居様、今の音はお嬢様が弾いて入
らつしやるヴァキオリンで御座います

鳴(鳴子へ目を付け)「ア、然うかへ、夫れて妾も安

心したが、兎角此頃の東京は我々女達には物騒な所に成つたので恐い〜と思つて居る矢先きにキエーウと變な聲がしたものだからツイ吃驚して眼が醒めましたよ。

よし本當に東京は馬鹿者が多くつて氣味の悪い所で御座いますが、モウ御隠居様位に成れば女も大丈夫で御座いますね。

武「何んだへ？」

よしイエ、ナニ私がお附申して居りますから御隠

居様は大丈夫で御座いますと申しましたの、

武「ア、然うかへ、然し鳴子にも困つたもんだね、

何處が面白くつて彼の梅林とか云ふものをキウ

〜云はせるのだらう、鳴子や、オイ鳥渡鳴子

や、

鳴(夢中に成つて耳にも入らず)「一と二と三と四と

〜、〜、〜、〜

武「鳴子、オイ鳴子……とても聞えないア、苦し

〜、あよしやお前憚りだが鳥渡呼んでお呉れ、

よしハイ (令嬢の方に向ひ) お嬢様………鳴子様
………お嬢様!

武「お前でも駄目だ、ア、然うくお隣の坊ッちやんに上げ様と思つて今朝買つて来た玩具のラッパが棚の上に有るから鳥渡取つてお呉れ、

よし「ラッパを………?」

武「マア能いから取つてお呉れ、

よし「是れて御座いますか、

よし「是れて御座いますか、

武「ウン然うだく、

老人は何思ひけん、ラッパを取上げブーブと

吹けば流石の鳴子も耳に入りたるものと見へ、

漸々ザアキオリンを止め老人を見て、

鳴「アラ嫌だ、お祖母様、何う爲すつたの、ラッパ

なんぞ吹いて、

武「ア、漸く聞こへたね、お前さんこそ何うしたの

です、一體何んの因果て其舶來の胡弓さへ彈始

めると眼の色迄替へて夢中に成るのたるう、先

刻から幾等鳴子くと呼んでも丸て鐵聲同様ぢ
やないか、

鳴「又お祖母様の十八番よ、後生だから止して頂戴
よ鳴子くッて呼ぶのは、畠や田圃の中にて
立つてやしまいし、

武「夫れでもお前が餘り騒々しいから鳴子と云ふの
も無理ぢや有りませぬ、

鳴「小聲にて」「練習を始めたのに洒落どころぢやな
いわ（大聲に）何か御用？

武「別に用ても有りませぬが、モウ齒の浮く様な音
を爲せるのは止めて下さい、當人のお前は平氣
だろが傍に聞いている人達の身體に障りますか
ら、

鳴「小聲に」「浮く程齒なんか有りもしないのに、

武「だからさ、澤山あれば我慢も仕ますが二三本し
か無いのが浮くから然う云ふのですよ。夫れに
聞いて居れば先刻から一と二と三と四と一と二
と三と四と何所迄行つても同じ數で持切つて勘

定して出でての様だが、たまには五と六と七と八位迄行つても能ささうなものぢやないか、

鳴「夫れはあ祖母様には分らないのよ、ミウヂック、音樂の拍子ですもの、

武「お前は二た言目には天保だの文久だのと被仰るが、如何に舊弊でも物の數位るは知つて居ますよ、

鳴「イーエ然うぢやないの……困つたわねえ、テンポと云ふのは音樂のタイム……未だ分らない

いわね、ホラ拍子の事ですよ、

武「拍子？アノ、トチ、ントンシヤンと云ふ様なものかえ、

鳴「マア〜 那麼ものよ

武「ソノ一と二と三と四とが……ウハ、ハ、ハ、ハ、（笑ふ）

よし（隠居の吐出したる入歯を取上げ）「アラ入歯が……」

武「オヤ〜 入歯が飛んで出たね、

受取つて口に入れる

鳴入齒が飛出る程笑ふなんてあんまりだわ、

武「兎に角那麽氣味の悪い音は止めて下さい、人間ばかりか猫迄居付かなく成りますよ、

鳴「ダツテ……」

武「鳴子さん、お前此お祖母さんを梅林で彈殺す氣かへ、

鳴「然らちや無いけれども……（鳥渡思入あつて急に調子を替へ）デワネお祖母様、妾今日は温順

しく止めますわ、

周章で樂器等を取片付ける

武「オヤ／＼／＼是は感心だね、鳴ちやんが是程す

なほにお祖母さんの云ふ事を聞いて呉れたのは今日が始めてだが那麽柔和い心が出るのも矢つ

張り年だね（泣聲をしながらおよしに向ひ）

よしやお前も賞めて遣つてお呉れよ

よし「本當に切角お天氣が續きましたのに雨が降らなければ宜しう御座いますねえ

武「誰が那麼惡口を云へと言ひました、あたしなみ
なさい

よしへー

此内鳴子は隠居に近寄り座す

鳴「ネーお祖母様、妾今日と云ふ今日は温順しくお
祖母様の云ふ事を聞きましたから、其代りお祖
母様も妾のお願ひを叶へて頂戴な

武「オヤ／＼何んだか大層柔和しいと思つたら直ぐ
にお強請かえ、夫れては餘り賞める程でも無か

つたが、マア／＼世の中は大概那麼ものでせう、
何んだか言つて御覽

鳴「モデ／＼して」「アノネ……デモ云ひ出してか
らお祖母様が可けないと被仰ると困るんですも
の

武「然うかえ、デハ黙つてお出てな

鳴「夫れぢや分らないから駄目よ

武「夫れなら何うすれば能いのですよ

鳴「宜しいと云つて頂戴よ

武「宜しい

鳴「未だ早過ぎるわ、アノネ……………デワネ……………實

はね……………

武「何を「ねーく」云ふんだねえ

よし「アラ御隠居様も被仰つて!

武「八ヶ間しいよ

よし「へー

鳴「實はね……………アノ……………妾お友達と……………お祖

母さん宜しいと云つて頂戴よ……………お友達と今

夜帝國劇場へ行くも約束をしたの、行つても能

いてせう、ネーお祖母様宜しいと被仰いよ

武「宜し……………くない……………い、け、ま、せん

鳴「何故、ネー何故さ

武「何故でも

鳴「何故でもとは不得要領だわ

武「不得要領さんなんて人は知りません

鳴「イーエサ其可けない譯が分らないぢや有りませ

んか、外の處と違つてお祖母さんも一度御覽に

成つた彼の帝國劇場ですよ、丸の内

武「知つて居ますよ、赤煉瓦の異人館でせう

鳴「イーエ彼れは警視廳、其の隣りの白煉瓦

武「警視廳でも何んでも可けません

鳴「アレ、警視廳へ行きたいのぢや有りませんよ、

其の隣りの帝劇ですつたら、然も今度は女優劇

て學校のお友達だつた堀さんだの河田さんもお

出に成るから見に行きたいと云ふのに、何う云

ふ理由で可けないの、説明して頂戴

武「又相變らずの我儘ですな、其の可けないと云ふ

譯はね、今日はお父さんもお母さんも御留守だ

し、兄さんもドンタクで何處かへ出懸た様だか

ら、詰り妾がお留守居番として居るのでせう那

麼時に年寄が附いて居ながら假令お友達と一緒に

ても夜、夜中年頃の娘を男の附添ひもなしに出

して遣つて、若し間違ひてもあつたら此お祖母

さんが何んと云つても詫が出来ます、夫れてな

くとも虫の付さやすい年頃の子をオイソレと出

して遣る事は出来ません

鳴「デモ往復共電車に乗ば大丈夫なもの

武「其の電車が大間違ひなものですよ世の中の親馬

鹿「チャンリンは俺の娘は質素で感心だ、電車で

學校へ通つて居ると喜んで居る内に、其電車の

中で馬鹿者が手を握つたり、お尻を撫てたりし

て飛んだ大怪我が元になるんだよ

鳴「まさか

武「イーエ然うて有りません、此間も谷中へお墓參

りに行つた時なんぞ現に此お祖母さんの手を握

つた人が有るんですもの

鳴「然うかも知れないが今度の女優劇丈けは見たい

わ

武「お前さん達は何んと云ふとヤレ女優だとか帝劇

だとかお云ひだが、實に今時の人は分らないに

も程が有るぢやないか、先頃もお前に連れられ

て始めて行つて見ましたが、第一可笑しいのは

彼れはお芝居の會社だつてね、此の調子で行く

と仕舞ひには吉原のお女郎屋も會社に成るだらうが、夫れもマア能いとしてお茶屋もなく成つてしまふし、ヤレ切符を買への、ソレ鈴が鳴るのと丸でステンションへでも行つた様ぢやないか

鳴「夫れが便利なのよ

武「便利かも知れないが中へ入つて見ると變な色變りの洋服を着た男だの、日本服の様な西洋服の様な譯の分らない着物を着た女の子が案内をし

て呉れたが彼れは皆異人さんだと思つたら矢ッ張り日本人だつてね

よし(肩を揉みながら)「アハ、ハ、ハ、ハ、

武「八ヶ間敷いよ

よし「へい

武「夫れから中では煙草を吸ふなとか御飯も食べるな、お茶も飲むなと夫れは恐ろしい御規則が有るさうだが、那麽事は御白洲へでも行つた積りて先づ辛抱爲るとして、彼の女優とか云ふ

者は一體何んです

鳴「彼れは新規に世の中へ生れた女役者ですわ

武「成程ね、生れたてのせいか餘り小さくつて妾には始め能く見えませんでした、キーン、聲のする方を望遠鏡でチーツと見たら成程居ましたね

鳴「蚤ぢやあるまいし那麼に小さかないわ、モウ女優の棚下しは能い加減になさいよ、可憐さうに彼の人達だつて餘細工ぢやあるまいし那麼に急

には仲びないわ

武「お前は知らないから然うお云ひだがね、昔し猿若町に三座揃つて居る時分を見せたかつた、立役ては八代目に小團治、彦三郎、關三、能かつたね、夫から女形で菊次郎、半四郎、田之助、しうが其又女形の樂屋入の美しかつた事、額へ紫帽子を宛て、頭を樂屋銀杏なんどに結てね、友禪の大振袖で下に緋の長襦袢を着て紫鹿の子の帯なんど締めてさ、緋天鵝絨の鼻緒の付いた

黒塗の下駄を穿いて襪を取つて歩行いたものて
すよ

鳴「然うてすかよ

武「夫れに其時分は帝劇の様に人の寢静まる様な時
刻になんぞ始めません、妾なんか芝居へ行く時
は明けの七つ頃から騒ぎ出して一度なんぞは餘
り早かつたもんだから駒形で追剣に遇つてね……
……

鳴「モウ澤山、那麽話を聞いても時勢が違ふから駄

目ですわ

武「マアサお聞きなさいよ、先づ最初三番叟が有つ

てね……

鳴「嫌々々々々（耳を押へる）昔の講釋なんか聞いた

つて仕様が無いわ（小聲にて）本當にあんまり

だわ、此間のマチネーだつて見損なつたのに又

今夜も行くなんて

武「鳴子をキツト見詰め思入あつて」「およしモウ肩
は能いから風呂の仕度をして下さい、其間少し

鳴子さんに話しが有るから

よし「畏まりました

およし退場す

武「鳴子さんモウ少し此方へお出て……お前さんは實に驚いたお嬢さんてすわ、成程お祖母さんよりお前さんの方が年も若いし、教育も受けたてせうが、假令教育が有うが無からうが時勢が何うて有らうとも女の嗜みには變りは有りませんよ、お前さんは自分の血統家柄と云ふものを

忘れましたか、勿體なくも御先祖十郎左衛門様は大阪方に去る者有りと聞えたる……

鳴「知つてるわよ

知つて居るなら云ふまいが兎に角去る者ありと聞へたる家柄ぢやないか、其家柄に生れ落ちたお前が下司下郎でさへ云はない言葉を平氣の平左て使ふとは何事です、お祖母さんも大抵の事は見逃しますが、家名を汚す様な振舞は御先祖の御位牌に對して捨て置かれません、サア云へ

るものならモウ一度今云つた事を云つて御覽んなさい

三〇

鳴「何を怒られて居るのだから妾にや些少も分らないわ

武「エー、マ、耻を耻とも知らない様な子が何うして武家の家に生れたのだらう、サア是許りは聞き流す譯には行きません、今云つた事をモウ一度云つて御覽!

隠居は長煙管を持つて立上りキツとなる

鳴「エー云ひますとも、今云つたのは此間のマチネ

「だつて見なかつたのに又今夜も……」

武「お黙んなさい! 如何に世の中の禮儀作法が崩れても武家の娘が「待ちねえ」の「止しねえ」のと職人同様な言葉使ひは許しません。サア此處へ御出て、お祖母さんが御先祖に代つて折檻します

鳴「冗、冗談しちや嫌ですよ、ソ、夫りや大變な聞違ひよ

三一

武「エ、今更ら那麽云譯は聞きません

鳴「イーエサ其「マチネー」といふのはね、西洋の

言葉て晝間の興行と云ふ事なのよ

武「ヒエツ！アノ、ソノ、「マチネー」とは異國の言

葉て晝間の興行、アノ晝間の……ア、然うか

へ、夫れは飛んだ「マチゲ」だつたね

鳴「駄洒落どころぢやないわ

此時およし登場す

「御隠居様お風呂の仕度が出来ました

武「ア、然うかへデハ鳥渡入つて來ませう

およしに手を引かれながら出、行かんとする

鳴「ア、お祖母様デワ何うしても行つては可けない

の？

武「分らない子だね、男の附添があれば兎も角若い

女達の夜歩行はなりません、

鳴「デモ、モウ直さお友達が切符を持って來るのよ

武「來たらお返しなさい

鳴「行けなければ妾……死んぢまうわ

武「お死になさい、拜見しませう」

鳴「アラ那麽残酷な事を……」

我儘娘の本性を顯はし怨みの眼に老母を睨み
ハンケチをビリ／＼に喰ひ裂きながら泣倒れ
る

武「泣いても無駄ですよ、ドラお風呂のマチネーへ
行つて來ませう、およし連とツとくれ

およしが令嬢を氣遣ふを態と押留めホロリと
して立去る

鳴（首を上げ）「エ、何うせ妾の様な者は大阪方の家

名を汚したり耻を耻とも辨へない女ですからお
祖母様のお氣には入りますまいさ、死ねと云ふ
なら屹度死んで見せるから其時涙なんか溢さな
いが能いわ、夫れとも那麽壓制な事を云はずに
遣つて下さるか？

急に振向けば最早人影なし

鳴「アラモウ行つて了つたの……ワァ……
と大聲に再び泣き倒れる」

此時奥より友人櫻井八重子の聲にて

八「御免下さい……お頼み申します

と訪問へども取次の出来らざればコッソリ襖を明けて入来る

八「御免下さい……アラ鳴子さん其處に入らしつたの、何んでもお聲がしたと思つて御免を蒙つて入つて来たのよ、マア御免遊ばせと能き處に座し

「へー今日は……アラ何故其方に向いて入らつ

しやるの……鳥渡鳴子さん……此方をお向き遊ばせよ、妾貴方のお尻とお話をして詰らないわ……ア、分つて、貴方妾の來方が遅く成つたんで怒つてお出てなんてせう、濟みません、然し夫れどころぢやないのよ、今絲子さんと一緒に來る途中で彼の方が又例の粗忽家てハシケチを忘れたから買ひに行くと云つてね、態電車から降りて洋品店を探すとザア中々見當らないんでせう漸く一軒見付けて入ると御承知

の絲子さんてすから嫌に慾張つて居ておまけに
氣が多いのでヤレ是れにしようかヤレ彼の方が
能いが高價過るとかモウ店中顛倒る様にさせて
置いて未だ極めないんでせう、妾も自烈たく成
りましたし貴女が氣を揉んでお出でだらうと思
つて一と足先へ大急ぎで來たんですわ、オ、熱

鳴子此内泣きながら首を上げる

(トト鳴子の容子に心付)「アラ鳴子さん貴女何う

か爲すつたの……何を泣いて入らつしやるの

……

鳴「八重子さん!

突然八重子の膝に取りすがり悲しげに顔を見
る

八(烟に巻かれたる顔にて)「ナ、何?

鳴「妾……シ、死な、けりや成らないわ……

八重子の膝に泣伏す

八「ヒエーッ!、ア、貴女が死な、けりや成らない

とは

鳴「デモ家のお祖母さんが帝劇へ遣つて呉れないんですもの……(泣く)」

八「ア、吃驚した、妾は又何か大事件が出来たのかと思ひましたが帝劇へ行けないからと云つて死ななくとも能いじや有りませんか、一體何ういふ譯で行つては成らぬと被仰るの」

鳴「夫れがね、お祖母さんは年寄でせう」

八「エ、マア大抵わね」

鳴「だから考へが自然古くつて今夜お友達と帝劇へ遣つて下さいと云へば兩親も兄も留守なのに男の附添もなしに女の夜遊はならないの大阪方に聞えたら家名を汚すのと仕舞には妾に死ねと迄云ふんですもの」

八「成程然うですか、然し那麽事を云つては悪いけれども、昔しから年寄の悪口の歌に「聞きたがる、死にともながる食べたがる、出しやばりたがる世話やきたがる」とか云ひますから過渡時

代の我々は災難なのよ

鳴「本當に蠻カラの年長者に這麼に權利を振廻され
ては妾悲觀して了ふわ

八「然し切符は買つて了つたし本當に困りましたが、
男の附添が有れば可いのですか？」

鳴「エー有れば大意張だわ

八「兄様もお留守？」

鳴「エー

八「能く出來てるわねえ（思入あつて）鳴子さん、

モウ時間も切迫して居ますから此上は斷然非常
手段を取るより仕方ありませんわ

鳴「非常手段とは家へ火でも放けるの？」

八「然うぢや有りませんが妾急に男を拵へませう

鳴「ヒエーッ！貴女我々の爲めに男を拵へるなんて
夫れてなくとも電車の中て手を握られたなど、
神経が過敏に成つて居るのに人目を忍んで男な
んど拵へては夫れこそは生きては居られません
よ

イーエ然うぢやないの、鳴子さんち耳を拜借
鳴子不審氣に近寄れば八重子密に耳語く

鳴「ア、くすぐつたい！ エー？ …… ウン、成程

(ニヤ／＼笑出す) ウフ… 成程… 家のち

祖母様？ 未だ一度もお目に懸つた事は無いの：

… エー？ ウン、制帽と制服？ 家に置いて有

るわ… アハ… 貴女の兄さん？ 若過ぎる

わ… ウン、承知なさるか知らん：

… エー？ 請合う？ アハ、ハ、ハ、

八(小聲にて) 静になさいよ (地聲になり) 何うて
す將來は外交官の令夫人を以て自認して居る丈
け有るてせう

鳴「謹んで大使夫人閣下に敬意を表します

ハ「デワ早く其屏風の後へ揃へて置いて頂戴

鳴子奥へ入り兄の制帽、制服、外套、敷島一

包、マツチ等を風呂敷に入れ取出し屏風の内

へ揃へる、此内奥にて友人青柳絲子の聲聞こ

ゆ

「御免下さい……御免下さい」

「ソラ来ましたよ、能くつて、貴女も甘く遣つて

頂戴

襖を明けて玄關の方を塵く

「此處ですよ……早く入らつしやい

「絲子登場す

「何うも遅く成つて相済みません、なんしろ彼の番頭が頑固で負けないんでせう、妾だつて癪てすから猛烈に談判して二十五錢のをトウく二

十二錢五厘に迄させてヤレ嬉しやと後ろを向いたらモウ貴女が居ないんですもの、本當にあんまりだと思つて急いで來たら又蝙蝠傘を置忘れて來ましたわ、アラ能いお住いねえ、妾始めて上りましたが結構なお宅だわねえ、然うして鳴子さんは何處に入らつしやるの

「ト自身の前に鳴子の座り居るに心付き

「アラ八重子さんだと思つたら鳴子さんなの、本當に妾粗忽しいわね、ア、然うく

ト急に座り

絲「今日は

トお辭宜をする

絲「夫れからお待遠う様

ハ「マアサ那麽事は跡として貴女黙つて「ウン」と

被仰いよ

絲「いきむの？」

ハ「然うぢやないのよ、今貴女が妾達の願ふ事を承知して下さらなければ今夜帝劇へ行けなく成る

のよ

絲「ヒエ、ツ、アノ帝劇へ行けない？、ソ、夫りや

大變だわ

鳴「絲子さんお願ひですから承知して頂戴、若し行

けなけりや妾死ぬ決心したのですから

絲「死ぬ決心？夫りや御尤だわ、妾だつて切符の代

を拂つて了つたのですから若し行けなるとなり

や一緒に死にませう、一體何を承知するの？

ハ「貴女後生だから男に成つて頂戴

五〇
絲「エ、宜しい、妾、女は大嫌ひだから次の世では是非男に成りますわ

八「次の世では遅過るのよ、今此處で直ぐにさ

絲「今此處で男に？ッ、夫りや貴女出來ない相談だ

わ

八「何が出來ない相談です、譯はないぢや有りませ

んか

絲「譯が無いなんて……二邊女に生れて了つたものを今更急に男に成れと云ふのは……妾這麼

無理な注文を聞いた事が無いわ

嗚「絲子さん貴女本當に餘りねえ、無理て有りやこ

そお願ひするんだわ、夫れを聞いて下さらない

とは貴女妾を見殺しに爲さる氣なの？

絲「イエ然う云ふ譯ぢや無いのですが幾等貴女方の

御願ひでも……コ、是ればッかりは少し六ヶ

敷さうですが一體何ういふ譯で那麼事を被仰る

の？

八「夫れはね、詰り此方の御祖母様が今日皆さんの

お留守に鳴子さんが男の附添もなしに夜分芝居などを見物に出ては可けないと被仰るのですから、貴女が未だお目に懸つた事の無いのを幸ひに、鳴子さんのお兄様の洋服を着て今にもお祖母様が風呂からお上りに成つたら妾の兄さんだと云つて御紹介しますから鳴子さんと妾を連れ出して下さい、分つて？

「お」然うよ

「お」然うよ

「お」然うよ

「お」然うよ

「お」然うよ

「お」然うよ

「お」然うよ

「お」然うよ

「お」然うよ

「お」然うよ

「お」然うよ

八「宜しい、絲子さん、妾、東洋軒の洋食を奢る！
絲「東洋軒？」

鳴「サア絲子さん、ウント被仰いよ、モウお祖母様が
が上つて来る時分だわ

八「ヒエーッ！お祖母さん？サア大變……ダガ妾
洋服に化けて男を着るなんて……

八「何を被仰るのよマゴくせずと早く其屏風の後
で洋服を着て……

絲「デモ妾……女……男……切符……ア！

東洋軒……

八「サアく早くく」

ト八重子は無理に絲子を屏風の内に押しして共
に入る、此内鳴子はマゴくして奥を見張る
鳴「早くして頂戴せば、何んだかお祖母様の聲が爲
る様だわ

屏風の中の聲

八「サアく早くさ……那麽にグルく廻つても
駄目よ

絲「鳥渡八重子さん、妾の買った許りのハンケチは

八「大丈夫在りますから安心なさいよ

鳴（奥を窺きながら）鳥渡々々早くく

屏風の中の聲

八「アレサ片ツ方のツボンへ兩足を入れても駄目よ、

早く爲さいつてば

絲「鳥渡鳴子さんく

鳴（屏風の方を振り返り）何んですよ

絲（突然リボンを結びたるハイカラ頭のまま、白シヤ

ツ、ツボンの服装にて半身を顯はし、未だ大丈

夫？

鳴「早くく

絲子又々姿を隠す、屏風の中にて

八「サア上着

絲「ア、痛いくく、那麽に持上げては腕が挫ける

鳴（顔色を變へて）「サア愈々大變、敵艦見えた、打
方用意！

屏風の中にて

ハ「シヤッポ、敷島、マツチにハンケチ

鳴「打てッ!

屏風の中より

ハ「ズドーン

ト聲諸共に絲子を突出せば、學校の制帽をポツクリ被り、身にはダブくの制服を纏ひ、桃色の絹ハンケチと外套を持ちたる儘、蹠躑さながら顯はれる、鳴子此體を見て思はず吹

き出す

絲「アッ! 大變、妾自分の着物を置忘れたわ

グニヤ／＼して屏風の内に取りに行かんとする時、八重子既に風呂敷包を造りて出て来る

ハ「何處へ入らつしやるのさ、貴女のお召なら、皆此中に入れて置きましたからお風呂敷丈け拜借して入らつしやいよ

絲「オヤ憚り様、アッ! ハンケチ

ハ「手に持つて居るじや有りませんか

六〇
「ア、然うだつけ、デワ鳴子さん此風呂敷を拜借よ、跡で洋服を入れてお返ししますから、能くツて？」

鳴「エ、」

「鳥渡々々、絲子さん、貴女那麽歩行方や物の云ひ方をしては駄目よ、モット男らしく爲さいよ」

「デモ何う遣つて能いかわらないんですもの」

「ホラ能く壯士芝居で遣るぢや有りませんか、高田や何かいさ」

「高田のヌーポ一式!? 困つたわねえ……仕方が無いわ東洋軒の事も有るから鳥渡遣つて見ませう」

急に高田の身振聲色になり

「オ、イ、八重子……お前も今日から這麽能い兄さんが出来て仕合せじやないかウーン? 東洋軒丈けじや兄さん承知が出来んからね、跡で中央亭のアイスクリームを奢つては何うか、ウーン? 何を笑ふのか……奢らんのか? 奢らんなら奢」

らんで……何うても勝手に爲るが能いぢやな
いか

ト大股に上手に向ひ歩行きかゝる、

此時隠居はおよしに手を引れ出て來り絲子と

ピッタリ出遇ふ、兩人の令嬢驚き周章て絲子

を下手に押遣り能き處に座す、およし退場す

八「お祖母様御機嫌能ふ

武「オヤ、櫻井さんの八重子さん、少しも存じま

せんでしたが能うこそお出て

鳴「お祖母様、其處に御出るのが八重子さんのお兄

さんよ

武「ナニ八重子さんのお兄さん？、八重子さんに御

兄弟の有つた事は些少も知らなかつたが然うか

え

八「ア、ノ、今晚お宅の鳴子さんと帝劇へ參るお約束

を致したものですから附添に兄と一緒に參りま

した

武「オ、ノ、左様で御座いますか（鳴子に向ひ）ッ

六四
レ御覽、餘所様でも中々一人てお嬢様をお出しに成りますまい、(絲子に向ひ)「コレワ、櫻井様の御子息で入らつしやいますか、始めてお目に懸ります、私は當家の隠居で御座いますが毎度八重子様には失禮許り申上げて居ります
絲子無言の儘モデ、する

八(小聲にて)「何んとか御挨拶を爲さいつてばさ

武「イヤ僕は……元來……櫻井……(べそをかきながら八重子に向ひ小聲にて) 鳥渡何んと云

へば可いのさ

八(同じく小聲にて)「何んとても被仰いてば

絲「ア、櫻井……花、花……花雄と申します、毎度這麼詰らん妹が失敬します

頑固に挨拶をすれば、八重子不満の顔を爲る

武「へ、櫻井花雄様と被仰いますか、然しまア八重子さんもお仕合せですねえ、這麼お立派なお兄さんをお持ちで

八「イーエ宅の兄は粗忽しいものですから本當に困

りますの

絲「イヤ八重子は這麼立派な兄が在りますから仕合
せてですが、此う云ふ粗末な妹を持つた兄こそ全
く困るです、何を爲せても不器用な上に姿色も
御覽の通りですから實に慨歎せざるを得んてす
なア

八重子怒つて絲子を瞰む

鳴「ネーお祖母様、八重子さんの兄様が附いて行つ
て下さるなら妾も帝劇へ行つても可いてせう？」

武「左様さねえ、花雄様も御一緒なら結構だが却つ
て御迷惑じゃないかへ

絲「(地聲に成り) イーへ能くツてよ

八重子周章て注意する

絲「イヤナニ決して其御心配には及ばんてす、鳴子
さんが御出てに成らんと切角の東洋軒が……
八重子又々瞰む

絲「ナニ、ソノ……切角妹も楽しんで居たのに失
望しますから何うぞお出てが願いたいてすな

八「兄さへ居れば大丈夫で御座いますから何うぞお許しを……」

鳴「ネー行つても可いてせう」

武「左様さ那麼に被仰るのだから……夫れではお供してお出で」

鳴「ハ「ア」嬉し！」

三人共飛び上り嬉しまぎれに立ち騒ぐ、老母は三人の聲に驚き

武「エー「マ」吃驚した……コレサ鳴子やお前何を

其處で飛んで居るのだよ、途中で降られると可けないから傘をお忘れてないよ、アレサ聞こえないのかね鳴子さん、お前着物でも着換へないのかへ

鳴「漸く聞付け」「モウ時間が無いから直ぐ行くわ

武「然らかへ、デワ、花雄様……花雄様」

鳴子急いで絲子を引く

絲「地聲にて」ナニ？」

鳴「お祖母さんが呼んでよ」

絲（男の聲にて）何か御用てすか

武（夫れては誠に恐れ入りますすが何分宜敷願ひます

絲御安心なさい僕が全責任を持ちますから

八（鳴）お祖母様行つて参ります

兩人急ぎ出懸けんとするを見て

絲（地聲に成り）アラ鳥渡、置去りにしちや嫌よ

女の振りにて追付かんとすれば兩人周章て

八（鳴）男！

絲子フト心付き男に成り

絲アツ然うだつけ……物言へば唇寒し秋の風か

……コリヤ飛んだ

思はず帽子に手を掛けるを見て

八（鳴）アツ！

と叫ぶに心付き（木の頭）

絲失敬しました

兩人駆走る、絲子大股に二三步行懸け風呂敷

包に心付き鳥渡戻つて周章て小脇に抱へ呆然

たる老母を跡に去る

（道具廻る）

二幕目 山王山の場

登場役人

前島鳴子

櫻井八重子

青柳絲子

絲子の兄嫁花井峰子 二十二

自文 磯家 靜間秋子 二十

平舞臺正面に溜池の遠見、立樹の間より星ケ

岡の茶寮を見せ、奥に石段の降り口、能き處
に共同ベンチ、凡て山玉山夜景の體、雷雨の
音にて道具廻る

七四

石段より鳴子、八重子の兩人一本の傘を持合
ひながら急ぎ昇り來る

鳴八重子さん何う仕たら能いのでせう、大變な事
になりましたね

△何うすると云つて外に仕方が有りませぬわ、一
體這麼天氣に成る筈では無かつたのですが大變

な降りてすわねえ

鳴是れと云ふのも家のお祖母様を欺かした天罰か
も知れないわ

△天罰にしては餘り早過ぎますが一體絲子さんは
何う成すつたのでせう、絲子さん、絲子さん
ん

雷鳴益々烈しくなる

此時石段より絲子外套を被衣の如く頭より被
り洋服姿にて風呂敷包みを抱へながら急ぎ登

七五

場す

鳴「絲子さん、貴女何處に何を仕て入らしつたの、心配させるじや有りませんか

絲子無言の儘ガタ／＼戰慄へる

八「絲子さん……絲子さんてば、確り爲さいよ

絲「妾……マ、マ、未だ生て居ますか

貴女生きて居りやこそ此處迄來たんじや有りませんか、モウ直に晴れるてせうから安心なさいよ

絲「貴女方はカ、カ、傘が有るから能いけれども妾モウ少してお腹の中迄濡れさうだわ

鳴「本當にお氣の毒ですが妾達は這麼着物てすから勘忍して頂戴よ

絲「妾雨よりも雷様が恐わくつて歩行けませんから何處か鳴らない處へッ、連れて行て下さいな

八「妾達こそ恐いのですが男になつた貴女こそ確りして頂戴よ

絲「ソ、ソ、夫りや無理だわ是れが心からの男なら

意張つても居ませうが何を言ふにも上ツ側丈
の間に合せものですから駄目ですわ
雷鳴電光

「アレー……鳥渡妾モウ迎も動けませんから後
生ですから車を雇つて来て下さいな、妾大急ぎ
で家へ歸つて着物を着換へて行きますから
「那麽事を言はずに電車でも宅迄行させう
「ア妾モウ氣が遠くなつて来た……早く呼ん
で来て下さらなけりや此處へ座つて了ふわ

「妾達も恐いけれども（八重子に向ひ）「絲子さんが
お可憐さうですから車を見付けて來ませうよ
「此處いらに居るか居ないか知れませんが仕方が
無いから行つて來ませう、絲子さん少し待つて
入らつしやい大急ぎで探して來ますからね
「ナ、何分お早く願ひます
「鳴子と八重子急ぎ石段を下り行く
「アレー……又光るわ、何故電光は光るんだら
う、八重子さん！ 鳴子さん！ 未だ見付からない

のかねえ

戦慄へながら歩行さ廻る

「アレー」一人に成つたら猶酷く鳴り始めたわ、
南無阿彌陀佛く迎も東洋軒の洋食位じや引合
はない、南無阿彌陀佛く

此内突然近隣に落雷の音聞こゆ

「アレー」

と一と聲叫んで共同ベンチの上へ風呂敷ごと
倒れ伏す、是れと同時に下手より静間秋子駈

來り落雷の音に氣絶して同じくベンチの側に
倒る、是にて雷雨止み四邊の静まりたるに安
心してか絲子恐々顔を上げ
「ア」吃驚した……ハテナ妾は雷に當つて死ん
だのかしらん
自身に手を抓めつて見る

「ア」痛い……是れなら先づ大丈夫だわ
空を眺め

「ア」何んと云ふ馬鹿氣た天氣だらう、モウ雨

八二
が止んで段々晴かゝつて來たわ、人力なんか頼
んで無駄な事を仕たわねえ

外套を脱ぎ捨てホット安心しながら四邊りを見廻す内ベンチの側に倒れたる人影に自を著

け
絲「ア！ツ！

と一と聲叫んで飛退き遠くより恐々透し見る
絲「ナ、何んだらう………雷獸か知らん
段々近寄り見て

絲「アラッ！リボンを掛けたハイカラの雷獸………

アッ！人間の女！

二三歩飛退き

絲「死人か知らん、ナ、南無阿彌陀佛………ア

ッ！然うだ、若しや今の雷で氣絶ても仕て居る
のじやないかしら

少しく近附き

絲「モシ／＼モシ／＼

氣味悪き思入にて段々近寄り恐々手首を觸り

見て

「アッ！ 未だ温い、サア大變、氣絶だ、(耳元にて)」

モシ貴女、氣を確にお持ちなさいよ……アッ！

「固つたわねえ八重子さん！ 鳴子さん！」

立上り駈出し見て

「呼んで見ても何處へ行つたか分らないし、打

棄つて置けば死んで了うだらうし、何んだつて

這麼處で氣絶なんぞ仕て呉れたんだらう

又々立戻り耳元にて

「モシ貴女や！、一體何處の誰なんだらう、芝居

だと直に生るんだけれど困つて了うわね、然ら

だ(大聲にて) 貴女何人！、氣絶をして居る人

と話しは出来なかつたツけ、モウ仕方がない何

處でも構はないから打つて見やう

脊中を二三ヶ所打つ内、秋子氣が付き唸る

秋ッ！

「アッ！ 氣が付いた、貴女確り爲さいよ！」

一生懸命に秋子をベンチの上に抱上げ倒れる

様に抱へて介抱する

絲「貴女お氣が付きましたか……大丈夫ですか……

……能つて何處もお怪我はありませんか……

サア確り遊ばせ……モウ妾がお附き申して居

ますから御安心なさい、ね、よござんすか

此時雲間より月影顯はれる

秋子段々に心付きフト振返れば見知りもせぬ

學生風の者の居るに驚きて離れる、絲子も同

じく打驚き互に暫時言葉なし

絲「貴女お氣が付きましたか……モウ大丈夫です

か……別段お怪我も御座いませんか……

己れの男姿なるを打忘れ親切に聞く、秋子は

斯くとも知らず月明に熟々と絲子を眺め呆然

として自失する

絲(少數氣味悪き思入にて)「ネ、貴女……未だ御

氣分が直りませんか……鳥渡貴女……何を

眺めて入らつしやるの、モウ御安心遊ばせ、妾

決して恠しい者では御座いませんから、妾……

……(フト自分の衣服に心付き)

「アッ！然うだつけ(急に立上り男に成り)イヤ君心配せんでも能いてす、僕は見られる、通りの學生じやが當時世間で云ふ不良青年の様な者じや無いです、イヤ彼女ばかりじやない、假令何百人の婦人の中に漬けて置いても決して危害を加へる様な者じやないから安心なさい、分りましたか、ウーン？分つたてすか

秋子夢心持に

秋「アラ……妾此處に何を仕て居たのでせう

「ア！漸くお氣が付きましたか、夫れて妾も……

：じやない僕も本當に安心したわ……イヤ、

ナニ、……實際安心したてす

秋(獨語の様に)妾一體何處から麼這處へ來たんだ

らう

「サア何處から來られたか夫れは僕にも分らんが

兎に角今の雷様で一時氣絶をされたのです

秋「氣絶！マ！然うだつけ、青山から歸りに不斷か

ら嫌ひの雷が鳴つて來たので夢中で駈出した迄
は覺へて居るが、デッ驚いて氣絶したのか知ら
ん

九〇

「然うです、貴女の驚いたのも無理はないです、
僕も實は非常に雷様が恐いので氣絶どころか死
ぬかと思つたのよ、……、ナニ死ぬかと思つ
たです

秋「さうして誰が助けて呉れたのだらう

「誰がと云つて僕が今貴女を介抱して居る内に漸

く氣が付かれたのです

秋（絲子の方を見て今更の如く驚き）アラ夫れて貴
郎が側に入らしつたの！

「然うです

秋「アラ嬉敷い事、妾漸く小説中の人に成りました
わね、貴郎妾の淋しい秋の風に散つて行く木の
葉の様な命を救つて下さつた恩人ですわね、貴
郎妾の魂のふかい底から泉の様に湧て來る感
謝の心を受取つて下さいな

九一

絲(すゐ)少敷煙(すくぢけ)に卷(ま)かれたる顔(かほ)にて) 何(なに)んだか僕(ぼく)には然(さ)う云(い)ふ言葉(ことば)は能(よ)く分(わか)らんですが貴女(あなた)精神(せいしん)を静(しず)めにや可(い)かんですよ、確(しつ)かりなさい、心(こころ)を落(おち)付(つけ)て秋(あき)心(こころ)が落(おち)付(つけ)けば落(おち)付(つけ)く程(ほど)、自(じ)分(ぶん)が自(じ)分(ぶん)を覺(おぼ)える丈(だけ)け夫(そ)れ丈(だけ)け妾(めかけ)の心(こころ)臟(ぞう)は貴(あなた)郎(ら)のあたくかい同情(どうじやう)に對(たい)する謝(しや)意(い)で満(み)たされるのです

絲(すゐ)愈(い)々(い)氣味(きみ)悪(わる)き思(おも)入(ひ)れて戰(ふる)慄(る)へながら) 是(こ)れは何(なに)んだか雷(かみなり)様(さま)より氣味(きみ)の悪(わる)い事(こと)になりましたが、女(おんな)に戻(もど)り四邊(あたり)を見廻(みまわ)し小聲(こゑ)にて) 鳴(なる)子(こ)さんや八(や)

重子(えこ)さんは何(なに)をして居(ゐ)るんだらう

秋(あき)獨語(ひとりごと)のやうに) 人(ひと)の心(こころ)は冬(ふゆ)の夜(よ)の月(つき)の光(ひかり)に蒼(あせ)じろく寒(さむ)さうに光(ひかり)る蛇(へび)の鱗(うろこ)て卷(ま)かれたやうに冷(つめ)たくなり、世(よ)の中(なか)は一日(いちにち)一日(いちにち)とバン(たか)の戰(あ)ひに温(ぬか)みの冷(さ)め果(は)てた血(ち)汐(しほ)を流(なが)したり、力(ちから)の抜(ぬ)け去(さ)つた手(て)を大(だい)地(ぢ)をうねり廻(まわ)る毛蟲(けむし)のやうに動(うご)かして他人(たにん)の殘(のこ)り少(すく)ない肉(にく)迄(まで)を撈(むし)り取(と)らうと仕(し)て居(ゐ)るのに、數(かず)知(し)れぬ怖(おそ)れと絶頂(ぜつちやう)に達(たつ)した驚(おどろ)きとて、死(し)と云(い)ふ不可解(いかかい)な或者(あるもの)の手(て)に捕(とら)はれた此身(このみ)を最(もつと)も大(だい)

九四
膽な最も力ある、最も温かい男の情けて引戻して下すつた……

此内絲子愈々氣味悪さに堪へかねたる思入にてソツト逃出さんとして二三步拔足に石段の方に向ひフト心付き

絲「アッ！外套と風呂敷！」

と眩きながら元のベンチの處へ戻り、秋子に氣付かれぬやう恐々包に手を掛け外套と風呂敷包を小脇に抱へて再び逃出さんと爲る、此

時秋子心付き

秋「アッ！待ッて下さい」

絲子は襟元より氷を入れられたる如く總身を竦めて立止まる

秋「貴郎は既に世界の最後が来て天地も一度に裂碎けるやうな恐ろしい刹那に灰色の暗闇から翼ある天の使のやうに顯はれて、妾と云ふ人間の持つて居る總ての中で最も價値の少ない肉の身を救ひながら、幾萬の富も幾億の寶石も其輝を失ふ

程貴い情の心に氷のやうな恐ろしい刃を突通した儘立去るのですか

（周章て近寄り地聲にて）ヒエーッ！何を被仰るの？妾が貴女に……（男に成り）僕は貴女に怪我をさせた覺は無いですが若しや今の雷ではないですか

秋子は怨めしげに絲子の顔をデット見詰め

秋雷に打たれて總身が赤黒く焼爛れ……
絲「ヒエーッ！」

秋「肉が切々に成つて飛散るより、五體の中の數多き總ての骨が一とつ／＼打碎かれたより、ヨリ以上の心の苦しみの叫びが聞えませんか

絲（恐々四邊を見廻し）僕には何んにも聞えんてすが一體甚麼聲てすか

秋「貴郎は妾の血管の中で養え立つやうな血汐の流れる音が分りませんか

絲「益々恐ろしき思入にて四邊を見廻し（小聲になり）タ、大變な事に成つたわねえ、未だ車が見付か

らないのか知らん (男に成り) 僕には何分貴女の被仰る事が能く分らんですから…… (小聲にて) 八重子さんも鳴子さんも本當にあんまりだわ…… (男に返り) 何うか御手数でも通常日本語で話して下さらんか「イブセン」や「マテルリング」の直譯では逆も遣り切れんですから

秋「妾の思想の詩的な表白法が貴郎に直感を與へないんですか

絲「ソ、夫れが能くないのです、夫れてなくとも氣味の悪いのに詩的や直譯では逆も居たゝまれなく成りますから能く氣を落付けて貴女の思ふ事をはつきり云つて頂戴よ……イヤ明瞭に云つて下さらんか

秋「ハイ……デハ神の御裁判の前に立つた積りて懺悔します……妾恐ろしい大罪を犯しました (我を忘れ)「ヒエーツ! 貴女人殺しても爲すつたの?」

秋「イ、エ未だ殺しは仕ませんが、是れから自分が
自分を殺さねば成りません（泣く）

絲（思はず再びベンチに腰を下し秋子に近寄り）ッ、
夫れは一體何う云ふ譯なの

秋「妾……妾……始めて、戀と云ふものを知つ
たのです

絲「戀?! 夫れや又誰れに?
秋「ア、貴郎に……」

絲「ヒエーッ!

秋「妾が自身ですら今迄見出さなかつた心の奥のお
くゝに穩かに眠むつて居た戀の湖水に……」

絲「戀の湖水!

秋「貴郎が投げた小石が起す幾千萬の連が一とつ一
とつ心臓の鼓動と成つて……」

絲「サア大變!

秋「妾の小さな胸の中に炎えるやうな血汐を漲らし
て居るのです

絲「ヂヨ、冗談じや有りませんよ……貴女、ッ、夫

れは能くないわ……、イヤ夫れは能くないてす、全く能くないてす

秋「能くないのは知つて居ますが是れが人の力の及ばない運命てす、自然てす、其運命や自然に捕はれた妾が貴郎と云ふ戀の刃て刳られた深かい傷のある心て外の男から妻といふ名を授かつたなら妾は其男を偽るのてす、妾は社會を偽るのてす妾は妾を偽るのてす

絲「那麼に偽らないて其傷とか云ふものを直して下

さらんか（小聲になり）飛んでもない事に成つたわねえ

直します、屹度直します、其傷のある愛の心を包んだ穢はしい此肉を捨て、直します（泣く）

絲「肉を捨るとは……死ぬのてすか？」

秋「死より外に薬は只一つより有りません

絲「ド、何處に賣つて居るのてす、買つて來ますから早く被仰い

秋「傷つけた貴郎に此肉も心も捧げるのてす

絲「ヒエーッ！ 妾に？」

秋「貴郎が自分の妻といふ名を塗つてさへ下されば其傷は直るのです」

絲「思はず立上り）妾の妻！！、ソ、夫れこそ貴女出來ない相談だわ」

秋「出來ない相談とは………デワ外に許嫁とか互に心を許した女とか………」

絲「那麻事が有らう筈が無いじや有りま………ソ、那麽事は斷じて無いです………然し是計りは假

令貴女が如何程云はれようとも天と地とがあべこべに顛倒らうとも實以つて眞に出來ない相談です

秋「夫れなら矢ッ張り死と云ふ不可解の力を借りて其傷を直すより外は………」

絲「ソ、夫れは可けない（小聲にて）困りましたわねえ（思入あつて再び腰を下し男に戻り）宜しい、僕は貴女に少しお話を仕ませう、能く精神を落付けて聞いて頂戴、元より僕は御覽の通り

一〇六

の若い女で……イヤ若い男で世の中の事などは未だ能く知らんのですが、平常兩親や先生から伺がつて見ると元來女と云ふ者は天職として男と一緒に社會を造る爲めに生れ來た者では有りませんが其昔し野蠻時代には何處の國でも婦人は男の玩弄物で下駄箱や炭取り程にも思つて居なかつたのですとさ、夫れから段々世の中が進んで今では漸く一家の主權だけは女の握るやうに成りましたが將來は兎も角現代の日本に生れ

一〇七

た婦人は矢張り現代の男が何を女から望むかを考へねば成りませんわね、處が今日我々婦人が……イヤ貴女方婦人が受けて居る學校教育が果して男の望む總てかと云ふと決して然うてない、日本の教育家が後馳に女の頭へ無暗に學問許り詰込んだ結果此頃出來上る女は不幸にも日本婦人の美點として誇るべき節操とか忠孝の道とか忍耐とか云ふ觀念の薄い者が多く成つてヒステリーでなければ貴女の様に文藝に捉はれて

一〇八

起きて居ながら夢を見て居る人が殖へるのです、よござんすか、然も男は御飯の焚ける良妻賢母を呉れると叫んで居ますとさ、てすからね、戀だとか情だとか云ふ事は後廻しにして精神も昔の人に劣らない然も今日の教育もある女に成つて驚かして遣らうじや有りませんか、何うてす、分りましたか、早く夢から醒めて頂戴よ：……イヤ堂々と婦人の天職を盡したら何うてす秋子は段々首を垂れ染々と聞く

秋「ア、何故貴郎が貴郎なのでせう、只夫れだけが残念です、然も誠に面目御座いませんでした：……妾覺醒しました……「イブセン」の「ノラ」は普通から覺醒して以上に成りましたが妾は以上から覺醒して普通に成りました系分りましたか、夫れて僕も助かりました、お互に健全な普通の者に成つて早く良妻賢母に成りませうね……イヤ貴女も成りなさい

月は再び雲間に入る

此時絲子の兄の許嫁花井峰子、石段より登り
來り兩人を透し見て小影に隠れ容子を聞く

秋「お陰で夢から醒めました、迷ひとは云ひなが
ら或哀れな秋子と云ふ女が貴郎をお慕ひ申した
事丈けは覺へて居て下さいませるか」

絲「夫れ丈けは決して忘れませぬ、是程驚いた事は
有りませぬから

秋「其御親切が有りますなら妾にせめてお名前丈け
お聞かせ下さいませぬか

絲「エー、夫れは何んでも有りませぬ妾は青柳絲
子と……イヤ、イト、絲子は僕の妹です……

秋「へ、お從弟さんが妹とは

絲「イヤ然うては無い、僕の妹がいとこで……

……(小聲になり) 同じ事だわねえ……ア、
然う、僕の妹の名は絲子と云ひますが僕は其
兄の青柳芳太郎と云ふ者です

此時突然物影より峰子駈來り、絲子の胸倉を

むんずと掴んで力まかせに首を押上げる

峰「芳ツちゃん

「絲子秋子驚く、能き時分に八重子、鳴子の兩人石段より登り來り此體を見て笑ひ興ず

絲「ア、苦しい……息が詰る……貴女は一體誰人です……其手を放してください

峰「イーエ放しません、死んでも此手は放しません……ワ、妾と云ふ許嫁が有り乍ら這那女と密會なんぞ爲るとはあんまりぢや有りませんか

よ

秋「アッ！ 矢ッ張り許嫁がッ……

絲「密會どころか其人は餘ッ程やつかいな人なんてす

峰「エ、洒落どころぢや有りませんよ、何うも此頃は容子が變だくと思つて居たら今日は音樂會へ一緒に連れて行つて下さるとお云ひですから夫れでは妾の僻かと思つて嬉し喜んで幾等待つて居ても來ないぢや有りませんか、あんまりだ

と思つてお宅へ行つたらお留守だし、モウ腹が立つてくいつその事死んで了をうかと思つて此處迄來たら這麼グニヤくした有平糖の溶けかゝつたやうな女と一緒に居て妾の事を忘れるなんて、ザ、残酷じやありませんかよ

秋「有平糖！」

絲「マ、又誰か死ぬのですか、貴女は一體誰人だかお顔が見えなくて分らない……………ア、苦しい……………妾女から怨みを受けるやうな覚えはない……………」

サア名前を被仰い

峰「今更名前を云へとは何事です……………貴郎は妾の聲迄忘れまじしたか貴郎の最愛の妻に成る女の聲も忘れまじしたかよ

絲「又妾に妻が出來たんですか……………ソ、其妻は一體誰れなんです

峰「ハイ聞せて上げませう、花井峰子と申すのです
絲「痛い……………峰子さんでしたか

峰「でしたか……………でしたかとは何んです、貴郎

は峰子みねこを知らないんですか。

絲いと「知しつて居ゐますから放はなしてください

峰みね「貴あなた郎たが妻わたしを殺ころしてから放はなします

絲いと「放はなさなければ殺ころせません……先さう刻びの雷かみなりは早はやく

鳴なり過すぎた……峰みね子こさん貴あなた女ま間ま違ちがひてす……

峰みね「イーエ間ま違ちがひません青柳あややなぎ絲いと子この兄あにの芳よし太た郎らうと云い

つたじや有ありませんか

絲いと「ソ、夫それは此この「イブセン」さんに云いつたのです

……芳よし太た郎らうは妻わたしの兄あにさんです

峰みね「長ちやう男なんに兄あにさんが有ありますか

絲いと「ウーイン苦くるしい……鳥ちよ渡つと其そ處こにお出いての「ヅー

デルマン」さん、助たすけて下ください……成なる程ほど男おとこは

辛つらからう……

秋あき「助たすけて……罪つみもない乙女おとめの心こころを力ちからの盡つきた鼠ねずみ

に猫ねこがぢやれ付つくやうに玩もてあそんで犬いぬが來きたから助たす

けて呉くれ……男おとこ！……ア、恐おそろしい毒どく虫むしの

やうな男おとこ……

絲いと「苦くるしさうに」又また始はじめまつた

秋「秋子は再び覺醒して神聖な文藝を友としやう、

秋子！ア！哀れなる幸福の秋子よアハ、ハ、ハ、

ヒステリー性の笑を遺して立去らんとする

峰「お待ちなさい、人の男を盗取つて笑つて此場を

去る事は許しません

秋子キツト峰子に眼を着け

秋「ア！淺ましい女の呪、毒蛇の様な女の執念！

峰「毒蛇？ 男の心迄盗んで置いて人の事を毒蛇など

と……………

絲「毒蛇でも可いから放して下さい

秋「毒蛇どころか、地獄の底の有るとあらゆる悪魔

が一度にお前の心に喰込んで執念の塊と成つた

のだ、サア其罪人の肉を喰へ！骨を舐れ！

峰「ナニ妾が悪魔？——ウーン口惜しい……………

絲「アイタ、タ、タ、タ、

突然絲子をベンチより引倒し秋子に飛掛らん

とするを此時八重子、鳴子の兩人駈來りて分

ける、絲子は隙を狙つて風呂敷と外套を小脇

に抱へて逃出さんとするを、秋子、峰子の兩人追來り秋子は風呂敷に手を掛くれば中より美しき女の衣服落る、峰子は絲子の帽子を撿り取ればリボンを掛けたる女の頭！絲子は大地にバツタリ座り秋子、峰子は果れて絲子を見詰め八重子、鳴子は腹を抱へて笑ふ（幕）

劇喜 出來ない相談 終

明治四十五年六月十日印刷
 明治四十五年六月十五日發行

出來ない相談
 定價金二十錢

不 許
 複 製

(有所場劇國帝權著作)

發行所

東京神田駿河臺
 南甲賀町九番地

興文館

(電話本局四七四九番)
 (振替東京一七八〇五番)

著 者 太 郎 冠 者
 發 行 者 清 水 金 右 衛 門
 印 刷 所 秀 英 舍 工 場
 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

喜劇文庫

太郎冠者新作

喜劇 出來ない相談 第一編 定價金二十錢
郵税金二

喜劇 心機一轉 近刊 定價金二十錢
郵税金二

喜劇 かた面 近刊 定價金二十錢
郵税金二

喜劇 三太郎 近刊 定價金二十錢
郵税金二

何れも帝國劇場に於て大好評を博し満都の士女をして抱腹絶倒せしめたる太郎冠者の作物たり、

發行所

東京神田駿河臺
南甲賀町九番地

興文館

電話本局四七四九番
振替東京壹七八〇五番

東 京 神 田 駿 河 臺
興 文 館 藏 版

- アーノルド氏著原名「亞細亞の光」
 ◎大聖釋迦牟尼佛 定價金六 小包料八 十 錢錢
- 二十五名士著 ▲文部省審査済
 ◎名士の釋尊觀 定價金八 小包料八 十 錢錢
- 文學士 蟻川龍夫先生著 ▲第三版
 ◎日蓮聖人傳 定價金八 小包料八 十 錢錢
- 文學博士 井上哲次郎先生著 ▲十六版
 ◎釋迦牟尼傳 定價金六 小包料八 十 錢錢
- 濱口惠璋先生編 ▲最新刊
 ◎七里和上言行錄 定價金一圓七十 小包料十 六 錢錢
- 濱口惠璋先生校訂 寫真版數百七個入
 ◎釋迦八相物語 定價金壹 小包料八 錢圓
- 濱口惠璋師校訂 口繪寫真數個入
 ◎釋迦一代記鼓吹 定價金壹 小包料八 錢圓

東 京 神 田 駿 河 臺
興 文 館 藏 版

- 西村晃一先生著 ▲世界歴史第一編
 ◎英國歴史物語 定價金五 郵税金六 十 錢錢
- 岡 成志先生著 ▲世界歴史第二編
 ◎米國歴史物語 定價金五 郵税金六 十 錢錢
- 川副嘉一郎先生著 世界歴史第三編
 ◎伊太利歴史物語 定價金五 郵税金六 十 錢錢
- 物集高量先生著 ▲世界歴史第四編
 ◎佛國歴史物語 定價金五 郵税金六 十 錢錢
- トルストイ著 落合先生譯
 ◎悲劇の力 定價金四 郵税金六 十 錢錢
- 澤田順次郎先生著
 ◎性慾論講話 定價金九 小包料八 十 錢錢

94
776
476

1464.

興文館藏版

日本文學物語

第一編

歷史の卷

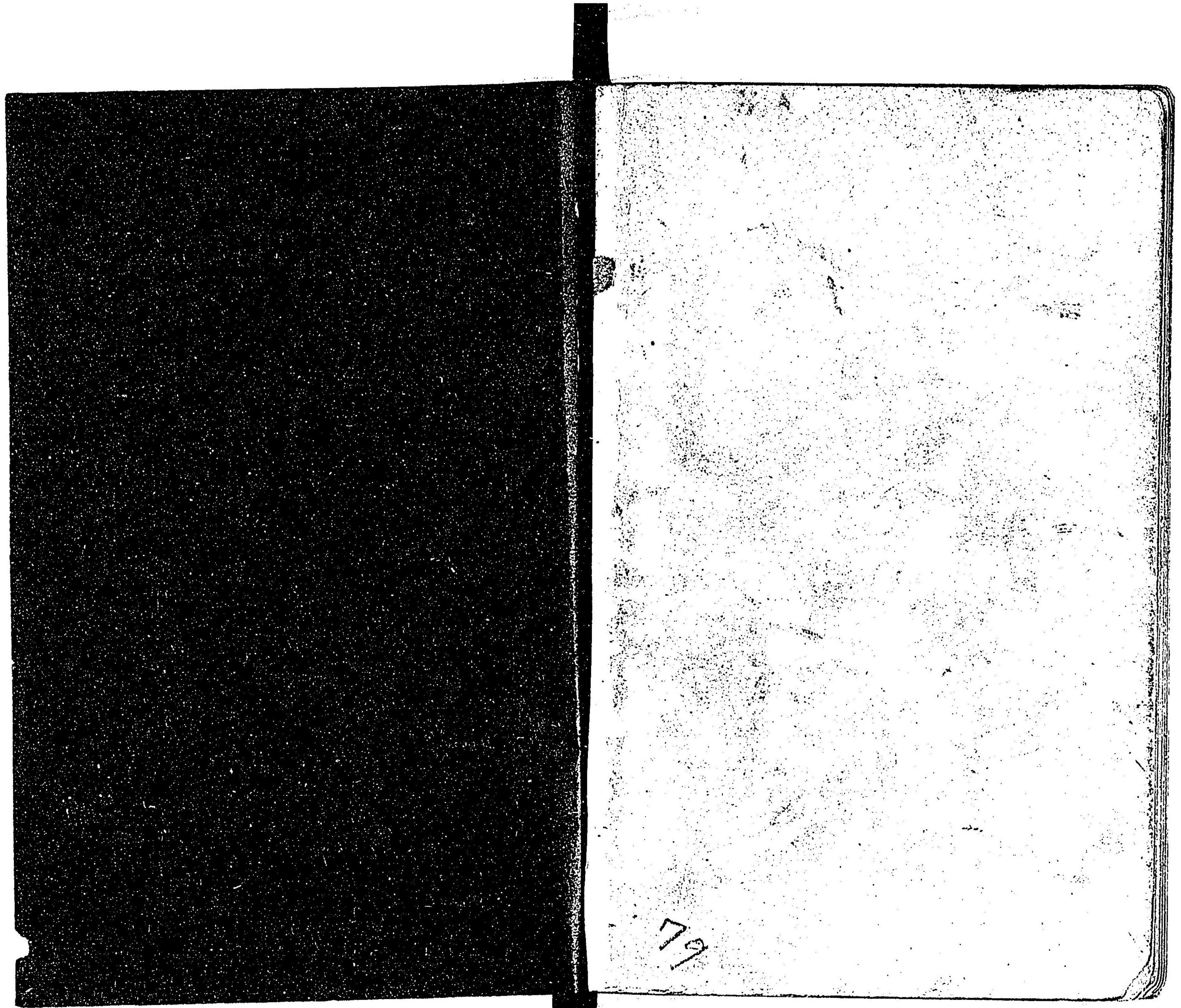
文學博士 芳賀矢一先生指導
第三高女教諭 芝野六助先生執筆

全十冊 各冊定價
小包金八錢

日本文學物語全十冊

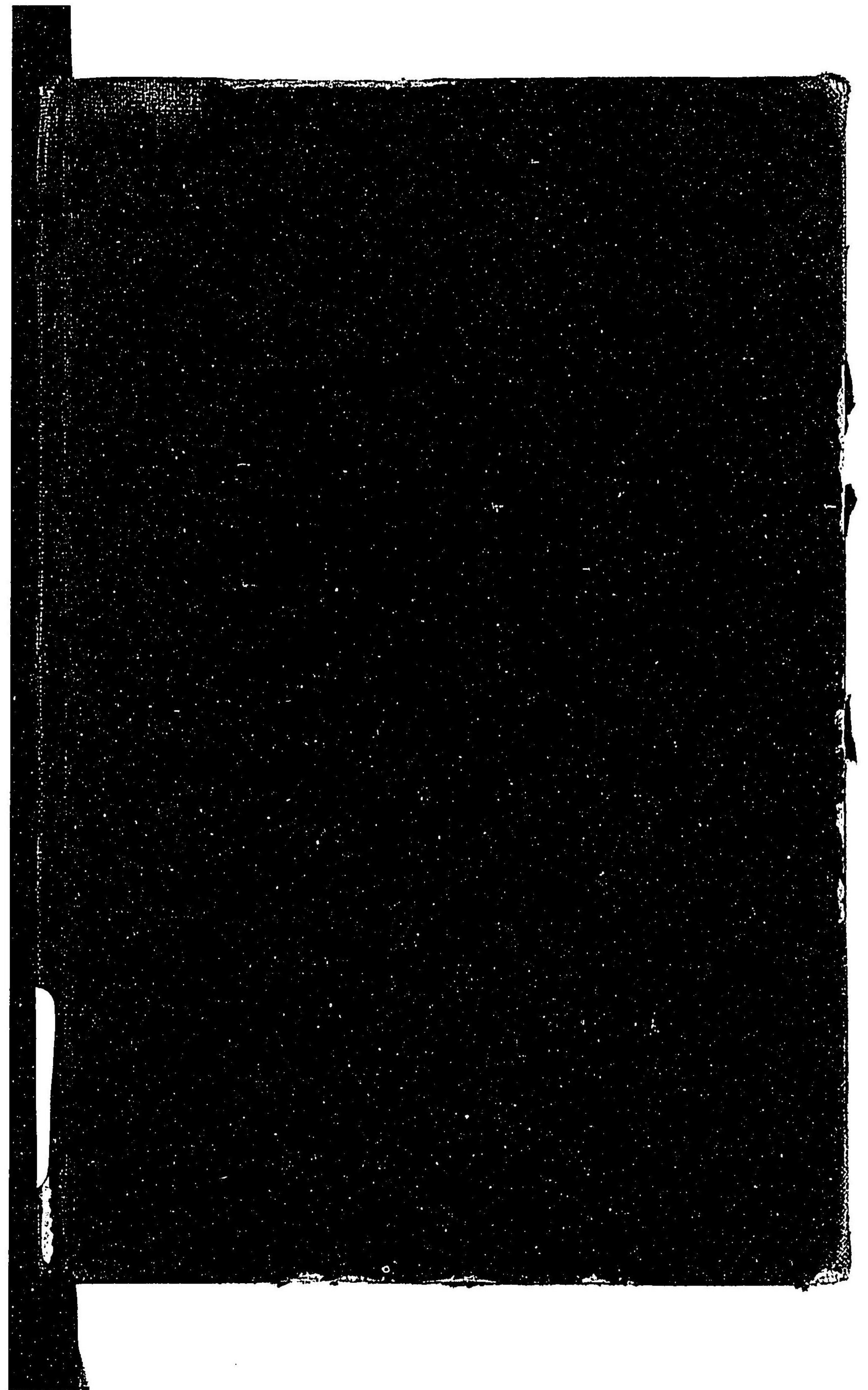
- | | | | | | | | | |
|---------|---------|------|------|----------|---------|------|------|------|
| 第十編 | 第九編 | 第八編 | 第七編 | 第六編 | 第五編 | 第四編 | 第三編 | 第二編 |
| 漢文、漢詩の卷 | 日記、紀行の卷 | 隨筆の卷 | 雜纂の卷 | 狂言、淨瑠璃の卷 | 俳句、川柳の卷 | 和歌の卷 | 小說の卷 | 軍記の卷 |

特に師範學校、女學校、中學校學生諸君の愛讀を望む



79

94
776



088894-000-4

94-776

出来ない相談

益田 太郎冠者 / 著

M45

DBK-0077

